

CELへの期待

エネルギー・文化研究所(CEL)が多様な知と交わり、重ねてきた実跡とはどのようなものか。共同研究者、寄稿者、あるいは研究員として、40年の軌跡を支えた方々の視点からその足跡を辿り、次なる時代への期待を綴っていただきました。



生活文化を起点に、
新しい豊かさの探求を

島原万丈 Shimahara Manio
IFULL HOMES 総研所長

大阪ガスエネルギー・文化研究所(CEL)とのファーストコンタクトは、私が前職リクルート住宅総研時代の2009年、一般社団法人リノベーション協議会を立ち上げてしばらく経った頃だったので、もう20年ほど前になる。実験住宅NEXT21を見学しないかとお誘いを受け、当時テキストでしか知らなかったSI(スケルトン・インフィル)工法や建物緑化を実際に見られるということで、一も二もなくお邪魔したのが最初の訪問だった。

当時NEXT21はすでに第三フェーズの水素燃料電池システムの実証実験に入っており、わざわざ生い茂った屋上および外壁緑化の中に次世代エネルギー供給システムが挿入された集合住宅は、まさに近未来の都市型住宅そのもので、強烈な印象を覚えている。

ただ、そのインパクトが大きすぎたせいか、

私はCELに対し、エネルギーインフラ企業らしいハード・技術中心の研究機関という印象を長らく持っていた。ところが2017年、『CEL』

116号で立命館大学の加藤政洋教授との対談のご依頼を機にバックナンバーを読み返してみると、その印象は大きく覆された。なにしろ加藤教授は花街研究の第一人者であり、私の対談素材は『Sensuous City [官能都市]』——都市工学や市場経済に基づく再開発を批判的に読み解いた調査レポートである。いったいここはどんな研究所なのか、という驚きがまずあった。

あらためて確認すると、CELの正式名称は「Research Institute for Culture, Energy and Life」であり、Energyより先にCultureを置く。この語順にこそ、研究所のエートスが表れているように思う。情報誌『CEL』の特集テーマは、最近のものでも「長寿社会」「文化



空間文化の
実践知をもとめて

加藤政洋 Kato Masahiro
立命館大学 文学部地域研究学域 教授

わたしがエネルギー・文化研究所ともっとも深く関わりを持つにいたったのは2015年のことでした。所属する立命館大学文学部から学外研究(サバティカル)の機会をえて、調査・研究に専念した時期のことです。

同年4月1日から8月31日までの5カ月間にわたる、最初にして最長期の受け入れ機関と



『CEL』116号(2017年7月)島原万丈氏との対談にて。撮影/宮村政徳

なっていたいただいたのがエネルギー・文化研究所(CEL)でした。日常的には、朝から昼過ぎまでグランフロント大阪北館ナレッジキャピタル7階のナレッジサロンを利用させていただきつつ、午後になると市域とその周辺でフィールド観察を繰り返したことが思い出されます。個人的なことで恐縮ですが、沖縄の共同研究を続けてきた親友を4月上旬に亡くし、大阪のまちを歩くことが落ち込んだ気持ちをまぎらわせる唯一の方途であったように思われます。このときほど大阪を歩きまわったことは、後にも先にもないでしょう。拙著『大阪のスラムと盛り場』(創元社、2002年)の出版以降、いくぶん薄らいでいた大阪への関心が静かに再燃しはじめたのも、このまち歩きを通じてでした。

小西池透所長(当時)や研究員の弘本由香里氏らとのミーティングを経て、まずCEL関係者向けにお話しする機会を頂戴し「都市魅力の空間学」と題して報告したのは、同年6月5日のことです。この話題提供をきっかけに、「エネルギー・文化講座2015【都市魅力シリーズ】モダン大阪都市の空間文化誌」を3回にわたって開催することになりました。

7月15日の第1回は「大阪の貌と輪郭」、8

芸術」「伝えること/伝わること」など驚くほど多岐に及ぶが、そこには常に生活文化を起点に社会や都市の変化を読み解く姿勢が貫かれている。そう捉え直すと、NEXT21も単なる技術の実験ではなく、私たち日本人のライフスタイルの実験であったのだと腑に落ちる。

さらにCELは、「語りベシアター」や「Talk About」のように、建物や設備の枠を超えて都市・地域社会の「語り」や関係性にまで踏み込む実践を地道に続けている。企業内シンクタンクとしては極めて異例であり、同じく企業内で都市研究に携わる者として、率直に羨ましく感じる点でもある。

1980年代に盛んになった企業メセナの多くがPRイベントに矮小化され、企業内研究所にも短期的な成果が求められるがちな昨今にあって、CELが40年もの間、生活者・文化・地域を主題に骨太の研究と発信を続けてこられたことに最大限の敬意を表したい。そして次の40年も、都市と社会の変化に寄り添いながら、新しい文化と暮らしの物語を紡ぎ続けていかれることを強く期待している。

月5日の第2回は「モダン大阪の新興地と花街」、そして同月26日の最終回は「(ポスト)モダン大阪の路地と横丁」と、それぞれ主題を掲げて報告しました。この連続3回の講座の内容をもとにして生まれたのが、拙著『大阪—都市の記憶を掘り起こす』(ちくま新書、2019年)にほかなりません。

遅筆のわたしを後押ししてくれたのが、都市空間の断片ともいべき場所・景観・空間の魅力を再発見できたことです。大阪の都市構造を機制する『キタ/ミナミ』にはじまり、横丁のある風景、葦の地方、地下街ラビンスにいたるまで。なにを隠そう、これら諸空間の魅力の再発見は、研究員のみなさんや連続講座の一般参加者とのやり取りがきっかけだったのです。とりわけ懐かしまれるのは、講座の打ち上げのあとの2次会で当麻潔氏(当時研究員・故人)や弘本氏と飲酒文化を議論したことです。のちに出版する拙著『酒場の京都学』(ミネルヴァ書房、2020年)は、ここに萌芽したといっても過言ではないでしょう。

あえて限定しますが、大阪の魅力は諸種の空間文化にある、というのがわたしの感想です。空間文化とは、たとえば長屋に暮らす人たちが編み出した独特の作法や生活の知恵、いわば実践知によって育まれるものにほかなりません。個性際立つ研究員の皆さんの探究心に敬意を表しつつ、これからも都市魅力としての空間文化の実践知を探究してください。



境界をほぐす、 柔らかな場を育てて

アサダワタル Asada Wataru
アーティスト、文筆家
近畿大学文学部准教授

エネルギー・文化研究所(CEL)との関わりをふり返ると、そこには常に「場」と「人」を介した学びがありました。十数年前、『CEL』104号に「新しい『居場所』から余暇を再編集する」を寄稿した当時、私は「住み開き」という生活実践をどのように社会の文脈へ橋渡しできるかを探っていました。未整理の思考にも丁寧な耳を傾け、誌面として形にしてくれたCELの姿勢は、私にとって大切な足場となりました。

その後、同志社大学大学院総合政策科学研究科との連携講座「コミュニティ・デザイン論研究」やCELでの勉強会に繰り返しお誘いいただきました。いずれも弘本由香里さんからの声かけによるもので、彼女が生活現場と研究的視点のあいだを柔軟に往復しながら問いを立てる姿勢に、感銘を受けました。調査や制度の議論にとどまらず、日常の小さな違和感や実践の芽を丁寧に拾い上げるCELの研究文化は、弘本さんを通じて私自身の活動とも自然に響き合っていました。

印象深い記憶の一つが、2016年初夏、グランフロント大阪の都市魅力研究室でエコ住宅研究者・濱恵介さんと語り合った勉強会です。



文化の種を、 花開かせる場所に

わかぎあふ Wakagi Etsu
作家・演出家

国内外で30を超える居住経験を持つ濱さんは、住まうことを実践的に探究されてきた方で、各都市での暮らし方や家族・仕事の変遷を伺いながら、私は「住み開き」的なコミュニティと従来の地域共同体の間にある「第三の縁」の可能性について議論しました。「ノマド」と呼ばれる生き方を圧倒的な実践量で歩んできた濱さんの経験は、空間やコミュニティをどう編集し得るのかを考える上で大きな示唆となりました。親子ほど年の離れた私が異分野からコメントできたのも、弘本さんの企画とコーディネートショウの賜物でした。

一方、208南森町という小さなサロンスペースで山納洋さんと共に行っていた活動は、生活の場とクリエイティブな議論が地続きに存在する学びの場でした。食卓の延長のような空間で表現やまちの話題を語り合う経験は、CELが大切にしてきた「生活から考える」という姿勢と自然に重なりました。

前述の同志社大学での連携講座では、冊子『コミュニティ・デザイン論研究』読本』に「表現を媒介に異なるコミュニティを越境する」を寄稿し、多様な立場同士が表現を介してつながりうることを論じる機会を得ました。また、

関西人は関西弁が好きだ。こんなに標準語が流通しているのにも拘わらず、関西人は相変わらず関西弁を喋る。それどころか大阪人は関西の他県の言葉にすら敏感で「あの京都弁やな」「あの子は兵庫の子ちゃうか?」「あれ知っとう」とか言うし」なんて、自分たちと比較したがる。そんなことどうでもええやん!とツッコミを入れたところだが、自分自身も気が付いたら言ってる時もある。テンポの良さと、軽やかな響きがないとどうも会話をした気にならないのが関西人の基本なのだろう。

声優の友人に聞くと、アニメなどでキャラの強



2013年3月、語りベシアター『谷崎潤一郎—愛と創作のジャンクション』の上演風景。関東大震災を経て関西に移り住んだ谷崎が、松子夫人との生活の中から光と闇の美をあふり出し、名作を編み出す姿を描いた。



終演後の記念撮影。写真右端がわかぎあふ氏、右から4人目がCEL研究員の栗本智代。文豪の生きざまと芸術性を追った公演を終え、出演者・スタッフが揃った一枚。

い役を関西弁で表現することが多いらしく、声優の勉強の一部に関西弁講座というのもあるらしい。廃れるどころかますますはやされてるようだ。三枚目や脇役が多いのはちょっと複雑だが……。言葉は文化だ。2013年、語りベシアター「谷崎潤一郎」の回に関わらせてもらった時にも強く感じた。谷崎は関東大震災で被災して、関西にやってきた人だが、そこで上方文化の虜になって、結婚をして住み着いた作家である。彼の人生の後半は上方詞で溢れかえっていたのだろう。そして毎日、それを聞いているうちに「細雪」のような美しい小説を生み出した。よ

最終成果として刊行された書籍『コミュニティ・デザイン新論』に「ルーズブレイス—目的から自由になる、もうひとつのコミュニティ論」を寄せています。

40周年を迎えるCELに期待するのは、研究と生活の現場をつなぐ媒介としての役割を超え、立場や背景の異なる人々が同じ時間と空間に併存し、互いの経験が触れ合うことで「境界がほぐれる場所」をこれからも丁寧に育てていくことです。社会が複雑化するなかで、小さく、弱く、断片的な声は見えにくくなっています。その声をすくい上げ、社会の言葉へ翻訳し、また現場へ返す—CELにはその循環を支える独自の力があります。コミュニティと表現の実践に携わる者として、私もこれからその歩みに伴走していきたいと考えています。



ホームパーティーのような親密さで、私的空間を公共に開いた「208南森町」の実験的風景。

く外国語を習得するなら恋をしろと言うが、まさしくそれだったに違いない。谷崎は上方に恋をして耽美的な世界を追求したのだと思う。

言葉の持つ力は、その土地に住む人の性格や、生き方も支配する。関西人の庶民中心の考え、楽しいことを分け合う文化はそこに根付いているのだろう。だからこそ阪神タイガースの応援や、英語も分からないのにインバウンドに気さくに笑いかける人が溢れているわけだ。

先日、小学校の低学年であろう子供とお母さんが近所を歩いていた。子供が「今日、から揚げ食べた」と言うと、若いお母さんが「そうか、ほな鶏探しておいで」と即座に答えた。子供はめげずに「スーパーで鶏肉売ってるやん」と返事していたが、なんと楽しい会話だろうかと感心して聞いてしまった。

こういう余計な一言が文化の種なのだ。私はそう思った。「から揚げが食べたい」「いいよ」だけでは母親はただ返事しているだけだが、あの親子は会話をしていた。大切なのは返事ではなく会話だ。その蓄積が文化となり、やがて人を豊かにするのだと思う。

「エネルギー・文化研究所」の皆さんに、これまで同様に小さな種を育てていく地道な活動をしていただきたいとお願いしたい。その種を大きく花開かせていくための肥料や、水を絶やさずに、こまめに世話を焼いてほしいと思う。その辺に転がっているなんでもない詞、言葉、コトバが私たちの礎なのだから。



大阪の個性を、 豊かな暮らしの礎に

下田吉之 Shimoda Yoshiyuki
大阪大学大学院 工学研究科
環境エネルギー工学専攻教授

私にとってエネルギー・文化研究所（CEL）との初めての出会いは、大学の教員になりたての1990年代の初め頃、所属する学科の特別講演に当時の倉光所長をお招きして「ジオカタストロフィ」のお話を伺った時であった。将来の世界の破局シナリオを描くという、民間企業の研究所のテーマとしては通常考えられないような壮大なスケールのお話に学生と共に圧倒されたのを昨日のこのように覚えている。

それから約20年後、情報誌「CEL」の2012年101号から2014年106号まで連載された「エネルギー講座」の監修を担当させていただくことになった。当時は東日本大震災の直後で、エネルギー問題に対する関心の高まりの中、市民一人一人にエネルギーリテラシー（エネルギーを賢く使うための基礎知識）を身につけていただくことを目的とした連載だった。連載終了の頃に、この連載を担当されていた当麻潔さんとグランフロント大阪のナレッジサロンのセミナーを開催させていただいたことを覚えている。今、当麻さんや識者による様々なテーマの記事を懐かしく読み返してみると、当時のエネルギー情勢を思い出すと共に、パリ協

定以降の世界的なカーボンニュートラルへの目標設定などこの間のエネルギーを取り巻く状況の変化を経て、市民がエネルギーリテラシーを身につけることの重要性がますます増していることを感じた。

私は、エネルギーシステムを需要側から研究している。エネルギー事業は供給側で見れば原料の調達やネットワーク技術といったビジネスと技術の世界であり、エネルギーは「MJ（メガジュール）あたりいくら」という無味乾燥な商品である。しかしエネルギー需要の側から見れば、エネルギー事業は明治以来の人々の暮らしを形づくってきた事業である。特にガス事業は照明、調理、入浴といった分野で新しい暮らし方を人々に届ける役割を果たしてきた。エネルギー消費の抑制が求められるカーボンニュートラルの時代においても、人々の豊かな暮らしを支えるサービスの観点からエネルギーシステムを考えていくことは重要であろう。

今や大阪ガスは海外事業の大きさが国内事業と匹敵する世界企業に成長した。私の所属する大阪大学が過去数十年の間ずっと掲げてきたモットーは「地域に生き世界に伸びる」である。



暮らしを支える企業の、 文化の場として

谷直樹 Tani Naoki
大阪市立大学 名誉教授
大阪くらしの今昔館・前館長

私は、大阪市立住まいのミュージアム（愛称：大阪くらしの今昔館）の企画から、開館、そして館長として運営を進める中で、エネルギー・文化研究所（CEL）の皆さまから様々な知恵をいただき、物心両面の援助を得ました。とりわけ3人の方々との思い出があります。

1992年、大阪市住宅政策課が、住まいのミュージアムの基本構想策定調査を行いました。そこにCELの副所長（後に所長）の古館晋さんが参加されました。私が「遊び心のあるミュージアム構想」を報告したところ、古館さんから大いに賛同するとの言葉をいただきました。私は意を強くして先に進むことができ、住まいのミュージアムの実現につながりました。

2001年に今昔館が開館し、研究員の弘本由香里さんにミュージアム協議会の委員をお願いしました。弘本さんは、今昔館にとって耳の痛い話もされますが、単に厳しいだけでなく、助け船を出してくれます。2012年度の大阪市の事業仕分けで今昔館が窮地に陥った時、真っ先に存続の集会を呼び掛けてくれたのが弘本さんでした。今昔館はこれをご恩を決して忘れてはいけないと思います。その後2015年2月にCELと今昔館との間で包括連携協定を

締結しました。これも弘本さんのご尽力の賜物です。

3人目は2016年に所長になった池永寛明さんです。その年の秋、内閣府が実施する「オリンピック・パラリンピック基本方針推進調査」への応募を薦めてくれました。弘本さんと私が1週間かけて応募の文章を練り、何とか採択にこぎつけました。翌年2月の3日間、今昔館の主催、CELのバックアップで「外国人の方と考える「和の住まい文化劇場」を開催しました。今昔館の江戸時代の町並み展示と、国の登録文化財である吉田家住宅を舞台に、和服を着た延べ17カ国58名の外国人が参加して、書道・茶の湯・上方舞など上方文化の粋を体験しました。このイベントから外国人の目を通して大阪の住文化を見直すヒントをいただきました。

つぎは吉田家住宅の座敷を借りて、「上方生活文化堂」という塾を開きました。産経新聞社の主催、今昔館とCELの共同企画で全12回開講しました。今昔館からお宝の掛け軸や雛人形を持ち出して座敷の床の間に飾り、講義のあとは趣向を凝らした旬の大阪料理に舌鼓を打ち、それが新聞の特集記事として情報発信されまし

大阪を地盤に地域社会との強い絆を保ちつつ、国際的に活躍する人材の教育と世界レベルの研究を生み出していく大学の姿勢として私も好きな言葉であるが、大阪ガスの発展の方向性も、地域に根ざしつつ世界に向けて発展していく点では同じではないだろうか。Daigasグループが「大阪」のアイデンティティを活かし、地域から豊かな暮らしを発信していく基盤として、今後もCELの活動に期待したい。



2014年11月にグランフロント大阪で開催されたセミナーの様子。エネルギーの現状を語り、異分野の面々と新価値創造へ向け熱い議論を交わした。提供：一般社団法人ナレッジキャピタル

た。上質で上品な大阪文化を体感できた至福の時間でした。その成果は、CELと今昔館との共同編集で『上方生活文化堂―大阪の今と昔と、これから』という本にまとまりました。

CELは企業内の組織なのに広報部門でもない不思議な存在です。私の専門である「住まい」に例えると、ガス事業はDK（ダイニングキッチン）、それに対してCELは「床の間」だと思います。著名な文化人類学者が「人間のすまいと動物の巣の大きな区別は、接客空間の有無である」と説いています。市民の日常の暮らしを支えるガス会社には、ハレの日の接客空間が必要です。CELはガス会社の床の間であり、「CEL」誌は季節に合わせ飾る掛け軸です。これからの発展に期待しています。



大阪くらしの今昔館・吉田家住宅で開催された「和の住まい文化劇場」の一幕。外国の人たちが大阪の豊かな住まいと暮らしの粋を肌で感じる機会となった。



濱 恵介
Hama Keisuke
エコ住宅研究者

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所
CELと私が出会ったのは、個人的な事情や願望が、いくつもの縁により導かれた結果である。1998年、私は日本住宅公団時代から数えて30年間勤めた住宅・都市整備公団を退職し、大阪ガスに転職した。CELに11年間勤め、非常勤を含めると16年近く席があった。

この会社には公団業務を通じて親しみと好感を持っていたが、実を言うと私はCELという特異な研究所の存在を当時は知らなかった。研究テーマには幅広い自由度があり、住宅と生活が主な研究分野の一つに位置づけられ、そこに配属されたことは幸運と言えない。この研究所の本質的な役割が「収益と離れ、企業のブランド価値を高めること」にある、と私なりに理解した。

公団勤務が長くなるにつれ、私は「都市開発・住宅整備を含め全ての経済活動は、地球環境と調和した形でない限り、いずれ社会も文明も破綻する」という確信を持つに至った。この転職により、環境問題、特にエネルギーの視点から住宅と建築、さらには都市を見直す絶好の機会を得た訳だ。

エコロジカルな住宅づくりを目指す私にとって、CELは願ってもない職場であり、社外から来た者としての視点や経験を活かせた。単純化すると、都市ガスの供給・販売を収益の基礎に置く企業の内社研究所でありながら「いかに少な

いエネルギー消費、または再生可能エネルギー中心で快適な住まいを実現するか」をテーマに研究し世に発信したことになる。これが許され評価されたことは、大阪ガスの度量の大ききであり、CELの役割に合致したからであろう。自己の価値観に対し純粹に素直でいられたことは、CELにおける最大の幸福であった。

この素晴らしい職場を離れて十年余り、状況はかなり変わったようだ。情報誌CELからの浅い印象だが、外部識者によるコンテンツが大半となり、所員みずからの研究成果や活動実績による発信が当時より少なくなった。研究員数が最盛期に比べ半減したのだから止むを得ない面もある。

しかし、たとえ人員が少なくなってもCELの役割は依然として大きい。技術・文化の境界を超え、長期的な思考と自在の空間感覚を融合させ、CELを活躍させて欲しい。環境問題と居住のテーマは依然として重要だし、全ての分野で持続可能性を軸に考えることが必要と思う。数ある想いのうち私が最も期待するのは、将来を見通す社内研究所として、企業本体が社会的に正しく機能しているかを映し出す鏡のような機能である。具体的には、人間の際限ない願望がもたらす生活の姿と、化石燃料の消費による環境への影響などエネルギー利用を一体的に論じ、望ましい暮らし方と共に事業の方向や将来像を提案することである。

我々が享受し当然と思っている現代文明の是非を問い、真に持続可能な世界を想像し、企業活動を新たな世界観に照らして展望することこそ、「エネルギー・文化研究所」ならではの存在意義ではないか、と私は考える。

地域の資源を生かし、未来を照らす光へ



加茂みどり
Kenji Midori
追手門学院大学 地域創造学部 地域創造学科教授

エネルギー・文化研究所(CEL)が設立されたのは、私が入社した1986年でした。当時新入社員だった私は、CELについて、「お客様からいただいたガスを自社の利益とするだけでなく社会に還元するために、社会に役立つ研究をする所属」と教わった記憶があります。そのCELに、2007年11月から2022年3月まで、私が大阪ガスに在籍した最後の約14年半、所属していました。個々の研究員の裁量幅が広く、歴代の所長は研究員自身の決定をかなり尊重してくださいました。

私の専門分野は住宅計画ですので、住まいに関する研究をさせていただきました。少子高齢社会に対応した住宅に関する研究として、家族の個人化への対応や子育てへの対応、高齢者への対応、環境保全等をテーマに、実験集合住宅NEXT21の住み方研究や中間領域の研究、京都都心部のコミュニティに関する研究などをさせていただきました。

エネルギー・文化研究所の仕事は、他の研究員の方と同様、社外の方とのコラボレーションにより進めることが多く、自治体の審議会等に参加させていただくことも多々ありました。外の世界とつながることは、とても貴重な経験だったと思います。

しかし逆に、社内の方々の関わりが薄い傾向もあり、よく「何をしている所属なのかわからない」という声もうかが

築き上げた信頼を、社会を切り拓く力に



山下満智子
Yamashita Machiko
同志社女子大学 非常勤講師

40周年おめでとうございます。私は1996年から2017年までCELに在籍、主に食文化を担当させていただきました。食育、調理と脳の活性化、火育(CELで創った造語、デザインと一緒に商標登録、火のある暮らしの提案、和食文化研究など調理や火の生活文化の継承に関する研究をしてきました。CELに転職した1996年以前にな

りますが、食育という聞き馴れない言葉を耳にして、当時カリフォルニアにあった支社からマクドナルドの食育グッズを送ってもらいアメリカの栄養ピラミッドなどの調査研究を始めました。食育基本法が成立する10年以上前でした。2005年食育基本法が成立して、学校教育、行政、生産者、さらに食に関係する企業にも食育に寄与する活動が求められました。『大阪ガスの食育』について営業、お客様部、料理講習室、広報、商品開発など様々な所属のメンバーと本社北館にあったCEL会議室で議論しました。食育先進企業のキッコーマン様にお電話して食育プロジェクトリーダーの経営企画室現執行役員の大津山厚様を講師にお招きしたことが懐かしい思い出です。

2004年には東北大学の川島隆太教授と「料理をすることが人間の脳にどのような影響を与えるのではないか」をテーマに共同研究を始めました。これも先生の本の一行から東北大学にご相談のお電話をしたことがきっかけでした。この研究は

高い志を、いまの言葉で紡ぎ直して



豊田尚吾
Toyata Shingo
ノートルダム清心女子大学 人間生活学部 人間生活学科教授

大阪ガスネットワーク・エネルギー・文化研究所(CEL)設立40周年、おめでとうございます。私は1998年度から2014年度まで貴研究所にお世話になりました。その間、一研究員の立場から、CELに与えられたミッションを実現しつつ、いかに社内外の理解を得るかという課題に取り組んできたように思います。個人の研究テーマの追究のみならず、研究所全体としての調査・情報発信、外部有識者との協働、オウンドメディアとしての情報誌CELの発行やWEBサイトの改変など。時々所長のリーダーシップの下、微力ではありますがいくつかの施策に携わる機会をいただきました。それらも含めCELの活動期間は四半世紀を大きく超え、社会や企業のあり方は大きく変わっています。40周年を機に、CEL設立当時に与えられた志の高い使命がどれだけ実現できたのか、しっかりと評価をすべきだと思います。実際、企業がコストをかけて取り組むプロジェクトである以上、成果は厳しく問われねばなりません。特に業績が日々明らかになるような社内部署からは、CELの存在意義を問うような(個人的な)声があったことも記憶しています。

一方で、CELの評価軸をどのように設定するかについて、明確な定義があるわけではありません。そのため高く評価してくださる方もいれば、不必要と断じられる方もおられます。私自身は長くお世話

大変大規模なものとなりました。CELがリーダーとなり先の食育プロジェクトのメンバーを中心に社内各部の協力を得ました。研究は脳科学の第一人者である川島隆太教授のネームバリューもあり、大阪ガスのユニークな研究として研究開始時から多くの新聞や雑誌等に掲載されました。さらに研究成果は大きな反響を呼びました。2008年問題といわれた高齢化に対する認知症予防への期待もありテレビ、新聞、雑誌に取り上げていただきました。学会発表も行い食生活学会に論文としても投稿し、現在も高齢者施設での厨房設備の必要性、料理活動の取り組みなどの科学的な根拠となっています。講演のご依頼も多く「調理と脳の活性化研究」は、認知症予防と調理などのテーマに社内の地域活動担当部署を中心に様々の場で講演させていただきました。

CEL在籍時、国立民族学博物館の石毛直道名誉教授、ミホミュージアム館長熊倉功夫先生、東北大学川島隆太教授、京都大学前総長の山極寿一先生はじめ各界の有識者の方々に講演や原稿、共同研究など様々なご依頼をさせていただきましたが、ご多忙の皆さまにいつも快くお引き受けいただきました。大阪ガスの活動への理解、CELが長年築いてきた活動の歴史があったからこそと思います。退職して10年、社会の激しい変化の中で社会が期待するDaijiasグループの役割も大きく変化していることと思います。これからもCELという組織に対する期待も役割も変化していくことと思いますが、研究活動や活動を通じて得られた各界有識者の皆さまからの信頼を社会や社業に活かしていく活動をこれからも続けていただきたいと思います。

ひとつの企業には様々な考えの人がいるからこそ多様性も生まれ、しなやかさも育まれます。企業が社会の一員として、その発展に責任を持つべきという考え、またそれにどこまでのコミットメントが必要かということについて、CELは独自の姿勢を示してきました。SDGsやESGといった時代のキーワードに、その都度対応して施策を打ち出している企業が多い中で、Daijiasグループは40年にわたり、そのような社会性に対して取り組んできた実績があります。CELが発信してきた言葉と実践の蓄積はまさしくそのエビデンスです。それは、社会から信頼されるための貴重な種ではないでしょうか。ただ私自身はそれを皆が納得できる形で説得することができなかった(種を咲かせることができなかった)という忸怩たる思いがあります。

したがって、これからのCELに対して期待するのは、これからすること、これまでしてきたことと企業が果たすべき責任との関連付けを行ってもらうことです。CELに与えられたミッションを改めて現代的に言語化し分類し、活動がどのミッション・価値創造に対応しているかの精査を通じて体系化し、より多くの人が納得できるような形で示してほしい。それができればCELに対する評価のばらつきが収束していくと思いますし、それが40年間活動してきたCELの責任でもあります。今後の取り組みに期待しています。